

合歓木

須藤哲平

秋田県・七三・造園業

突然何年ぶりかのお便りお許し下さい。

先日「合歓木^{ねむのき}」という処で食事をした時、とてもご飯がおいしいと言いましたら、「秋田こまちで、姑母^{おば}が作ってくれるのです」と給仕の方がおっしゃいました。

二度目の時、その方はあなたの家のお嫁さんで、その店はあなたの息子さんの経営している事や、あなたの手芸教室、御主人が五年前に亡くなられた事など色々教えてくださいました。懐かしさがこみ上げて湧くままにこのお便りを差し上げます。

私達が当時の樺太で国策に沿う仕事に従事したのは、日本が太平洋戦争に突入して暗い緊張に包まれていた昭和一六年の春でした。私は一八、あなたは一七でした。男女百人余りの会社で私達は最年少者で、班長はあなたの叔父さん、何もかも任せきりでした。私達は短歌を志していた事もあって誰よりも気持ちを通じ合い、理解しあえる仲だったと思っております。

あの翌年、私は軍属に身を置いて遠く南の島で働くことになり、そのまま兵隊になり、そして終戦、復員して落ちついた時あなたの婚約を知りました。

あれから五〇余年の歳月が流れて、私も古稀をすぎました。その間、何か言い忘れた感じが現在も続いて持っています。慌ただしい世相の中で、限られた時間の中での文通はなんにも言えなかったけど……。

あなたの叔父さんが「波」を須藤の嫁にやると言った一言は、無口な私には珠玉の一言だったのです。私の古いアルバムにあなたの写真が数葉貼られています。あなたにも同じくあるでしょうか。当時は減多に写すことのない写真を交換することはそのままプロポーズにも似た意味もあつたような気がします。これは私だけの希いかも知れないけれども……。

もう一つあなたの知らない事があります。いまのようにバスもなく汽車も稀にしかない戦時中の事、二〇キロを歩いてあなたに会いに行ったのですが、その日あなたは留守でした。

戦争は多くの人々に大きな苦しみを強いるものでしたが、私もとり返し出来ない犠牲者だったと思っております。